

男女共同参画・働き方改革委員会企画 JOYFUL通信

仕事と育児についての一経験

北海道大野記念病院整形外科

阿久津 祐子

札幌医科大学に入局した19年前、整形外科女性医師の割合は約3%、同期10人中女性は1人でした。整形外科専門医取得後、聖隷浜松病院手の外科マイクロサージャリーセンターで研修。産後、手外科専門医を取得、非常勤、アルバイトを経て、現在は常勤として勤務しています。

尊敬する女性医師の先輩から「昔はキャリアと家庭を両立することは不可能だった。先生の時代には可能にできる環境であることを切に願う。」とのメッセージをいただきました。それが働き続けていることの根底にあります。フェイスブックCOOシェリル・サンドバークは、「女性が社会的な役割を維持するためには、手を挙げ続け、居続け、一歩踏み出すことが必要だ」と言っています。

自己犠牲を払って長時間労働することが医師の美德として重んじられる傾向にあり、女性医師は産後長く働けないことに対して、他の医師に申し訳なく思い退職すると以前の日整会誌の特集にありました。以前特別扱いが理解できないと同僚より叱責をうけ、退職を考えたとき、当時の上司の男性医師から医師不足、女性医師の増加を考えると、

社会として損失になるから頑張ってもらいたいとのエールをいただき思いとどまりました。また、育児中の女性医師よりも何時まででも働ける若い男性のほうが良いという声や、特別扱いが理解できないという同僚医師からの不満の訴えがあり、非常勤に勤務体系を変更したこともあります。しかし、子供の学童保育への迎えが夜遅くなる日が続き、退職しました。

経験を基に、今までの既成概念の整形外科医師像の業務をすべてこなすことはできないので、自分の条件を見直しました。理解のある夫も多忙、双方の親も遠く離れています。契約する際に、過去の反省を基に際限なく時間外は働けないことを理解してもらい、それを暗黙の了解として加味しているのであれば報酬を減らしてほしいと話し合いました。自分のスキルと、やりたくても物理的にできないことを理解してくれる同僚に恵まれ、常勤として手術、外来業務ができています。平日の子供の習い事の送迎は子育て支援タクシーと契約、同僚たちと、お互いの仕事内容や不在の予定を共有し、学校の個人面談、子供の定期病院受診などは、人手が少なくならないと

きに、入れるようにしています。病児保育可のベビーシッターサービスに登録し、状況によってはみてもらえる環境を準備しています。しかし、去年の地震の時の様な非常事態で、どうにもならないときもありました。同僚の理解のもと、休みをいただきました。

仕事とプライベート両方の余地を作る最善の方法は、優先順位を自身で意識的に選択できる環境を作ることだと思います。個々によりサポート体制が違い、可能な勤務形態が違います。前例云々で数少ない女性医師を一括りにはできないと思います。「長時間拘束可能＝やる気」ではないと思ってほしい。育児中ではない女性医師、男性医師も様々な事情により長時間労働不可能なケースもあるかと思っています。原稿依頼をいただいたときには、順風満帆とはいかない私の経験はどうなのだろうかと一時躊躇いたしましたが、多様な形態に対する理解が広がればと書かせていただいた次第です。今までご意見をくださったすべての方に、ご指導いただいたことを感謝しながら、さらなるスキルアップをめざし働き続けています。